

|              |   |
|--------------|---|
| Title        | カタロニア語におけるアラビア語起源の語彙についての考察   |
| Author(s)    | 長谷川, 信弥   |
| Citation     | Estudios Hispánicos. 2012, 36, p. 7-14  |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/98006">https://hdl.handle.net/11094/98006</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〔研究ノート〕

## カタロニア語におけるアラビア語起源の語彙についての考察

長谷川 信弥

0. いわゆるアラビア語起源の語について、スペイン語では、「16世紀までのスペイン語の語彙にとって、ラテン語の次に重要な位置を占めていた」[ラペサ (2004:123)] ことや、大量の語彙が12世紀までに借用され、13世紀のアルフォンソ時代を経て、15世紀まで続き、4千語を越えるとされている [寺崎 (2011:52)] もの、カタロニア語の語彙への借用は多くはなく、その影響についてもそれほど重要ではないと考えられてきた。しかし、Sanchis Guarner (1980:80) は次のように述べ、その重要性について言及している：

“L’element aràbic en el lèxic català és important, i encara que sigui molt menys copiós que no pas el que tenen el castellà i el portuguès, erren els lingüistes que l’han subvalorat.”

「カタロニア語の語彙におけるアラビア語要素は重要であり、カスティリア語やポルトガル語のもつ語彙に比べ大量ではないものの、それを過少評価してきた語学者は誤りである」

これからもわかるように、スペイン語への借用に比べ、カタロニア語へのそれは量の少なさゆえに研究者の興味もこれまで少なく、管見のかぎりではこの Sanchis Guarner (1980) の発言とカタロニア語学の碩学 Coromines による語源辞典 Coromines (1980-1991)<sup>1)</sup> 以外にはあまり見あたらない。しかしながら、あくまでスペイン語と比較すれば少なかったということであり、他のロマンス語からすれば、カタロニア語も多数の語彙を受容しているといえる。

本稿<sup>2)</sup>はこのテーマについての今後の包括的な研究のための手がかりとなるような方法論について検討することを目的とする。各語彙の詳細な記述には入らないものの、さまざまな経緯を経て今日に至るであろう借用の状況を個々に観察することはおこなっていく。

1. 従来、アラビア語からスペイン語への借用語について、もっとも顕著な特徴であるといわれてきたものが形態上のそれであり、アラビア語の定冠詞にあたる *al-* をともなう語形がスペイン語では多くみられることである。このことは、基本的にはカタロニア語でもみられ、多くの場合両言語に共通する現象であり、フランス語やイタリア語での様相とは異なることとされている。とはいうものの、同語源の語彙で、カタロニア語において *al-* ではじまらない語形のもの、スペイン語では *al-* をともなっている場合は比較的多くみられることから、借用の経緯の違いが反映されていることが予想される。なお、本稿はどちらの場合がより多いかという数量的な比較は考察の対象としない。

これらのことから、語形の違いによる比較材料としては、いくつかの論点が提示できる。本稿はスペイン語、カタロニア語ともにアラビア語からの借用語が用いられている場合のみを対象としているが、後述するとおり、これらのケースだけではなく、同一の意味内容の語が一方の言語ではラテン語由来のもので、他方はアラビア語からの借用語を用いているケースもあり、検討を要するものであるが、これはいまのところ、今後の考察の際に組み入れていく課題としてあげるにとどめる。

語形上の分類として、以下に4つの点をあげる。

(1) スペイン語、カタロニア語とも *al-* の語形：

様々な状況や時代に借用されており、形態上の類似のみが共通する特徴であると考えられそうなもの。たとえば、*cat.*<sup>3)</sup> *arròs*, *esp.* *arroz* [ともに「コメ」] は、アラビア語の *al-ruzz* が *ar-ruz* となり、両者の語形になった一般的にいわれているもの、バレンシアでのコメ栽培などの経緯から、バレンシアのカタロニア語からスペイン語への借用の可能性も提示されている [Corominas (1991:360 (vol.1))]. なお、*cat.* *arròs* は1262年が初出であり、スペイン語も同時期の記録があるとされている。

また、*cat.* *alcova*, *esp.* *alcoba*; *cat.* *almívar*, *esp.* *almíbar*; *cat.* *almadrava*, *esp.* *almadraba* のように規則的に *cat.* *-v-* と *esp.* *-b-* が対立する語形もあるが、それぞれの初出の時代も異なり、*alcova* が1309年 (*esp.* *alcoba* は1272年) であるのに対して、*almadrava* は1803年 (*esp.* *almadraba* は14世紀後半) と時代のずれが大きい。

さらに17世紀になってスペイン語から借用された *alicates* のような例もあり、統一的な説明はむずかしい。

(2) スペイン語のみ al- の語形 :

cat. barnús, esp. albornoz [ポルトガル語も同形で「バーヌース (フード付きマント)」]

前者は1366年に記録されていて、ふたつはほぼ同時期の借用であるが、語形が異なる。これは、cat. barnúsがアラビア語の *barnús* からであるのに対して、esp. albornozは *burnús* と異形が起源として提起されていて、地域差によるものではないと考えられる。

また、語形のあとの数字は初出年を表すが、このほか以下のような例があげられる : cat. cotó (1249), esp. algodón (950?), port. algodão; cat. magatzem (1255), esp. almacén (1225) ; cat. mandonguilla, esp. albóndiga (1406-12); cat. sucre (1249), esp. azúcar (1220-1250)

一見して、初出の時代は13世紀が多いことがわかるが、これはそれ以上の情報をもたらすものとはいえないであろう。

(3) スペイン語、カタロニア語とも al- のない語形 :

cat. síndria (1371), esp. sandía [ともに「スイカ」]; cat. tarifa (1315), esp. tarifa (1680) [ともに「料金」]

スペイン語の *sandía* の初出は15世紀末の *Nebrija* であるがラテン語の文献には早い時期で記録があるとされる。この語は、アラビア語の *baṣīḥa sindīya* に由来し、「Sind (いまのパキスタン) のメロン」を意味する。また、*tarifa* も初出だけをみるとカタロニア語の古さが目立つが、スペイン語では1294年初出の *alenzel* が同意味で中世全般に用いられていた。これもアラビア語由来で、語形としては現在は *arancel* である。そして、のちにカタロニア語から借用され *tarifa* が一般化したものと考えられている。

ここにあげた例だけをみると借用の時代の違いが反映されているかのようにも考えられるものの数少ない例だけでは判断できない。

(4) カタロニア語のみ al- の語形 :

cat. albergínia (1328), esp. berenjena [ともに「ナス」]

このケースがもっとも少ないと思われるが、この例に限っては語源が異なり、カタロニア語は *al-bergínia* で、スペイン語は *al-bedenǵéna* に由来するとされる。もとはペルシャ語に由来する語である。ちなみに

この語は、Joan Esteveによるロマンス語初の辞書であるといわれる *Liber Elegantiarum* (作成1472年、出版は1489年) に *abarginia* (a8v<sup>o</sup>a) として記載されている。

前述したとおり、これらは両言語において借用語が用いられている例に限った分類であるが、次節で紹介する Colón (1993) では、同義の語に対して片方の言語でのみ借用語が用いられている場合も基準として考慮されている。また、意味の観点からの分類ではあるものの、借用の経緯も記されていて、より包括的な考察ができる指標であるといえる。

2. 前節で述べたように、Colón (1993:61-62)<sup>4)</sup> は意味の観点からスペイン語とカタロニア語のアラビア語からの借用語考察のための基準を提示しているが、そこでもカタロニア語よりもスペイン語へのアラビア語の影響の大きさを強調している。そこで列挙されている論点は以下の通りである：

- (a) アラビア語の同一語源の借用がカタロニア語、スペイン語でともに見られるもの： *cat. aljub, esp. aljibe* [ともに、「雨水などを溜める貯水槽」]
- (b) アラビア語の異なる語源からの借用が同一の概念を表しているもの：  
*cat. rajola, esp. azulejo* [ともに「タイル」]
- (c) スペイン語におけるアラビア語からの借用に対してカタロニア語ではそうではないもの： *cat. baladre, esp. adelfa* [ともに「夾竹桃」、前者はラテン語 *VERATRUM* に由来する]
- (d) 前項 (c) の逆、ケースとしてはまれ：  
*cat. ant. atzebib, esp. acebibe* (アラゴン州のみで記録) [ともに「ブドウ」]
- (e) カタロニア語圏内で異種のある場合<sup>5)</sup>：  
南部<sup>6)</sup> *cat. tramús, esp. altramuz*, 北部 *cat. llobí* [いずれも「ルピナス」]
- (f) 時代に沿って形態を変えた場合：  
*cat. ginesta, 古 esp. hiniesta, esp. retama* [いずれも「エニシダ」]

## カタロニア語におけるアラビア語起源の語彙についての考察

古い時代のスペイン語は、カタロニア語と同様、俗ラテン語からの *hiniesta* を用いていたが、14世紀以降はアラビア語 *ratama* に由来する *retama* を用いるようになった。

これとは逆に、*cat. matalaf, matalàs* は、中世 *esp. almadrague* と同語源であったものの、スペイン語は *colchón* というラテン語から古フランス語を経て入った別の語を用いている。

### (g) 前項 (f) と関連する経緯：

古 *cat. nora, esp. noria, añora* [ともに「井戸の汲み上げ用の水車、ノーリア」]

現在のカタロニア語、*sènia (sénia)* または *sinia* は、スペイン語の *aceña* に相当し、粉挽き用の水車を意味するアラビア語起源の語に取って代わられている。

### (h) 「二次的」アラビア語由来の語と呼べるもの：

本来のアラビア語ではないものの、ラテン語やギリシャ語からアラビア語を経由してカタロニア語に入ったとされるもので、例として、ラテン語の *GYPSUM* は、*esp. yeso, cat. guix* [ともに「石膏」] となったが、これと並んで、南部のカタロニア語では *algeps*、またアラゴン語では *algepz* という語彙がみられ、これらはラテン語からアラビア語を経由して入ったものとされる。

### (i) 同一地域にアラビア語起源の語とそうではない語の両方が存在する：

13世紀には、*rambla* と *areny* [ともに「川岸の砂地」] や前項 h) の *guix* と *algepç* が確認される。

先に述べたアラビア語定冠詞 *al-* の有無をスペイン語とカタロニア語での語形の差異に基づく分類 (1) ~ (4) の各ケースは、Colón (1993) による語彙の意味的分類と対比させて観察すると次の点が指摘できる。

まず、(1) に関しては、これが *al-* を伴っていることから、スペイン語とカタロニア語において、それぞれ別々にアラビア語またはイベリア半島のアラビア語から借用されたものではなく、最初にスペイン語、より正確にはカスティリア語に借用されたのち、これがカタロニア語に導入され、結果的に同

じ語形を有するに至ったものが多いのではないかと予想される。これについては、カタロニア語だけではなく、ガリシア語やバスク語での借用の状況が参考になるものと思われるので、今後の考察課題とする。またこれは、Colón (1993) の分類基準と比較をすれば、このなかの (a) (f) または (g) に相当するものと思われる。すなわち、同一の概念の語が両言語にわたって存在するケースがそれで、上記以外の例を挙げると *cat.*, *esp.* とともに *alfil* [アラビア語での意味は「ゾウ」] は、ともに初出が同時代、13世紀末であること確認されていることから (a) (f) があてはまると考えられる。

次に、(2) については、Colón の (a) (b) に相当する可能性があると思われるが、形態が異なっても両言語に存在することの意味は、それぞれの語の借用経緯の問題であり、統一的な結論が出るわけではないように思われる。このように、Colón (1993) の (a) は、(1) にも (2) にもあてはまることになるが、意味的分類と単なる *al-* の有無による分類との関連性を問うことの意義は検討されなければならない。

(3) については、たとえば、*cat. sindria* と *esp. sandia* は初出が確認される年代も異なることから、借用の経緯が異なり、各言語が個別にアラビア語から借用したことも考えられる。年代だけをもって、ただちに確固とした理由づけができるわけではないと思われるが、これがさらなる調査の動機としては十分となるであろう。この点についてもさらに今後の課題としたい。この (3) は、可能性としては、(a)、(b) も、また (f)、(g) さらには (h) もあてはまる。

(4) は、もっとも少ないケースであり、個々の例をひとつずつ考察することができるものと思われる。それゆえ、今回は一例のみをとりあげたが、さらなる考察を経て、なんらかの説明を加える必要があるだろう。これは、(f) にあげた例が該当すると思われる。

3. Colón (1993) の細部にわたる分類を見ると、スペイン語とカタロニア語における *al-* の有無での区別は単なる形態上のものにすぎない。しかしながら、先項での観察の繰り返しになるが、いくつかの例を見ても、たとえばスペイン語からカタロニア語へ *al-* つきで借用された後にこれを取り去り、再解釈して、語頭に *al-* のない語形を用いているような例はほとんどない。その逆もしかりで、*al-* なしで借用された後にこれを語頭につけて用いる語形もない。このことから、これはアラビア語から借用される段階で、*al-* の有無が決定される要因や理由があり、その経過を経た結果が語形に反映されていると

## カタロニア語におけるアラビア語起源の語彙についての考察

考えることに不都合はなさそうである。ゆえに、al-の有無だけでは、借用の経緯、もう少し具体的に言えば、経由を説明するための十分な指標とはいえないものの、スペイン語との語形の異なりを概略的にでも説明する分布表としては有効なものであるといえるのではないだろうか。それに加え、Colón (1993) のような意味的要因をも加味した、より細かな基準を設定すれば、このテーマについてのスペイン語、およびカタロニア語の語史的経験の違いを説明でき、すなわちそれは両言語におけるアラビア語の影響の違いを確認することが可能となってくるように思われる。現段階ではそれぞれの対応を明確に例示できないうえに、おそらくは一對一の対応関係にはならず、交差した対応になるであろうことから、さらなる考察をしたのちに提示することとする。

次の作業への課題としては、数多く列挙されているアラビア語から借用語の個々の経緯をひとつずつ考察し、ここで扱った分類基準との適合性を考察していくことが必要ではないかと考えられる。

\*本研究は、科学研究費補助金・基盤研究(C)、課題番号22520440「現代スペインの諸言語の語彙に関する対比的研究」の成果の一部である。

### 注

- 1) この Coromines (1980-1991) の語源辞典ではアラビア語からの借用語の多くに詳細な記述がなされているが、この Sanchis Guarner がこれについての考察としては唯一のものであるという Coromines (1936) “Mots catalans d’origen aràbic”, *Butlletí de Dialectologia Catalana*, XXIV, pp.1-81, 286-288. の記述が反映されているものと考えられる。
- 2) 本研究は上述のとおり、「現代スペイン語の諸言語の語彙についての対比的研究」の一環としておこなっているため、主にスペイン語とカタロニア後との対比をカタロニア語を中心に見ていく。そのため、アラビア語事態の音韻、形態的記述はおこなわない。これはひとえに筆者のアラビア語に対する知識不足によるものであるが、やはり、借用の経緯を詳述するためには、借用元であるアラビア語についての記述は不可欠であるので、これについても今後は記述が可能となるよう考察を深めたい。
- 3) これ以降、各語彙につける言語を分ける記号として、カタロニア語には cat. を、スペイン語(カスティリア語)には esp.、ポルトガル語には port.



を用い、さらに細分化した表記が必要な場合にはその都度表記する。

- 4) 本書は、もとは1976年に *Léxico catalán en la Romania*. (ed. Gredos) としてスペイン語で書かれたものであるが、増補改訂され、カタロニア語 (バレンシア語) に翻訳され出版されたものである。
- 5) これについては、Sanchis Guarner (1980:80-83) も、バレアレス諸島やバレンシアのほうで、カタロニア北部 (Catalunya Vella) よりもアラビア語からの借用語は多い、と述べている。
- 6) ここでいう「南部」とは、現在のバレンシア自治州で話されているカタロニア語 (バレンシア語) を指すが、カタロニア自治州リエイダ (Lleida) 県に相当する地域も含む方言地域を指して用いられている。そのため、Jaume Iによるバレンシア、マジョルカ征服によって再入植した地域の言語は、ここへの移民の多くがリエイダ地方からであったことから、中世のこの地方の方言が「南部」に拡大したと考えてよい。これによって、c) や以下のh) の項で指摘のあるアラゴン地方との隣接によって起こる現象が説明されうる。

## 参考文献

- Bramon, Dolors (2008) “Arabismes del català i altres mots relacionats amb l’islam en la segona edició del “Diccionari de la llengua catalana””. *Estudis romànics*, vol.30, pàgs. 127-139.
- Bruguera, Jordi (1996) *Diccionari etimològic*. Enciclopèdia catalana.
- Colón, Germà (1993) *El lèxic català dins la Romània*. Universitat de València.
- Corominas, Joan y José Pasual (1991) *Diccionario crítico etimológico castellano e hispánico*. Gredos. 6vols.
- Coromines, Joan (1980-1991) *Diccionari etimològic i complementari de la llengua catalana*. Curial/la Caixa. 9vols.
- Sanchis Guarner, Manuel (1980) *Aproximació a la història de la llengua catalana*. ed. Salvat.

寺崎英樹 (2010) 『スペイン語史』、大学書林

ラペサ・ラファエル (中岡省治他訳) (2004) 『スペイン語の歴史』、昭和堂